

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00010

研究課題名(和文)『大学定本』『易経古義』諸稿本の分析による伊藤仁斎倫理思想の研究

研究課題名(英文) A study of the ethical thought of Ito Jinsai through the analysis of the manuscripts of Daigaku-Teihon and Ekikyō-Kōgi

研究代表者

遠山 敦 (Tohyama, Atsushi)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：70212066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：従来の伊藤仁斎研究においては、仁斎の『大学』に対する否定的評価のみが論じられてきたが、本研究ではそうした傾向に対して、仁斎が『大学』の「至善」を「仁敬孝慈信」という日常的徳目を意味するものと捉える独自の理解に基づき、肯定的にも理解していた点を明らかにすることができた。一方、仁斎の『易』理解については、象・象二伝に対する積極的な評価と、繫辞伝に対する否定的な評価が、あくまでも『易』を日常生活の次元で理解しようとする仁斎の基本的姿勢に基づくものであることを確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本近世の支配的思潮は儒教、とりわけ朱子学であったといえる。これに対し伊藤仁斎は朱子学に対抗し独自の儒教理解を示したが、その特徴の一端を彼の『大学』及び『周易』理解に見いだすことができる。朱熹の理的世界観やその学の形而上学的性格に対して、仁斎が示した儒教をあくまでも人倫日用の道と捉える理解は、八条目を否定し「至善」を「仁敬孝慈信」といった日常的徳目と捉える『大学』理解や、『易』において繫辞伝・説卦伝を否定的に捉え、象伝・象伝を「陰陽消長の理」を明らかにすることを通じて日用人倫の動態理解に資するものとしたことに示されている。これらの内に日本の伝統的倫理観の一つの特徴を窺うことができる。

研究成果の概要(英文)：Previous research on Ito Jinsai has only discussed Jinsai's negative evaluation of the Great Learning, but this study has clarified that, contrary to this tendency, Jinsai also had a positive understanding of Shi-Zen(the highest good), based on his own unique understanding of it as meaning the everyday virtues of "benevolence, respect, filial piety, compassion and faith."

On the other hand, with regard to Jinsai's understanding of the Book of Changes, it was possible to confirm that his positive evaluation of Tuan zhuan and Xiang zhuan and his negative evaluation of Xici zhuan were based on Jinsai's basic attitude of trying to understand the Book of Changes at the level of everyday life.

研究分野：倫理学

キーワード：伊藤仁斎 大学 易

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、日本近世の儒者伊藤仁斎の倫理思想の特質を、その『大学』注釈である『大学定本』及び『周易』注釈である『易経古義』の書稿本の分析から明らかにしようとするものである。仁斎の倫理思想は、主として『集注』に代表される朱熹の経書解釈に対する批判的検証に基づいた仁斎の自信の経書注釈によって形成されていくが、本研究では、そうした経書注釈のうち、とりわけ仁斎がその経書性を否定した『大学』、及びその一部のみを選択的に評価し、注釈を行った『周易』に焦点を当て、仁斎の手になる『大学定本』『易経古義』諸稿本の成立過程を辿りながら、仁斎倫理思想が、朱子学をどのような観点から批判し形作られて行ったかを明らかにする。

(2)『大学定本』『易経古義』については、現在その確定的なテキストが刊行されていない。研究代表者は、同様に現在確定的なテキストが刊行されていない『中庸發揮』及び『孟子古義』についてテキスト確定の作業を行ってきたが、本研究はそれを引き継ぎ、現存する諸稿本の分析を通じて仁斎の『大学』および『易』解釈の変遷を辿りつつテキストの最終形態を確定するとともに、仁斎学の修身論や活物観の特質を解明することで、仁斎の倫理思想の一端を解明しようとするものである。

2. 研究の目的

(1)伊藤仁斎の倫理思想は、主として朱熹『集注』に対する批判的な検討に基づく経書注釈によって形成されていった。それらは具体的には『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『大学定本』として結実していくことになるが、そうした注釈作業の最初期において、仁斎は、朱子学が絶対的経書とした『大学』を孔子の書にあらずとして否定した(「大学は孔子の遺書に非ざるの弁」)。朱熹にあって『大学』は、三綱領・八条目釈、格物補伝などに見られるように、その修身論の基底をなすものであったが(「初学徳に入るの門」『大学章句』)、そうした位置づけの『大学』を経書として否定するところに、仁斎学の成立の一端があったといえることができる。その後、仁斎自身の『大学』注釈は、初期の「大学は孔子の遺書に非ざるの弁」以降、十五年あまり経過した天和三年頃成立の『大学定本』(改修本)を最古稿本として、その後何度かの改訂が加えられていくことになるが、そこで朱熹の修身論の何がどのように否定されているのかを明らかにすることは、仁斎自身の修身論の特質を考察する上で大きな手がかりを与えるものとなる。

(2)『易』に関しては、『周易本義』に集約される朱熹の『易』解釈は、基本的に『易』を占いの書と見るものであるが、注目すべきは、朱熹が(とりわけ繫辞伝に)その宇宙論的哲学、ひいては形而上学の論拠を求めたことにある。これに対して仁斎は、「象・象及び文言は儒家の易也。繫辞・説卦は筮家の易也。」(『語孟字義』)とし、『易』を「専ら陰陽消長の変を明す」ものとして象伝、象伝及び文言伝のみを評価し、朱熹が重視した繫辞伝を否定した。このことは宋学的な形而上学を否定した仁斎学の立場と軌を一にするものであるといえよう。仁斎が、その注釈『易経古義』において、朱熹と異なるどのような意味文脈で『易』三伝を捉えようとしたのかを明らかにすることは、仁斎の所謂「活物」観の特質を考察する大きな手がかりとなる。

3. 研究の方法

(1)現存する『大学定本』諸稿本のうち、仁斎自身がその作成に直接関わった「改修本」「林本」「元禄十六年冬校本」の三種(いずれも天理大学付属図書館古義堂文庫蔵)について、『大学』解釈の変遷を辿りつつ、テキスト最終形態の確定を行う。また併せて、朱注や旧注との対比を踏まえて、仁斎修身論の特質を考察する。

(2)現存する『易経古義』緒稿本のうち、仁斎自筆あるいは仁斎がその作成に直接関わった「自筆本」「改修本」の二種(いずれも天理大学付属図書館古義堂文庫蔵)について、『易』解釈の変遷を辿りつつ、テキスト最終形態の確定を行う。また併せて、朱注や旧注との対比を踏まえて、仁斎『易』解釈の特色を考察する。

(3)闇斎、藤樹、徂徠、履軒といった近世諸儒による代表的な『大学』及び『易』理解と比較対照することにより、仁斎の『大学』『易』理解の特質、さらには仁斎倫理思想の特色を明らかにする。

4. 研究成果

(1)仁斎の『大学』解釈の特徴として、その本文確定の特徴を挙げることができる。『大学定本』では、本文について基本的に所謂『古本大学』を取らず『章句』本文を踏襲するが、全体を孔子による経一章と曾子による伝十章に分かつ『章句』に対して、『定本』はそれを分かつ、『大学』を「戦国の間、齊魯の諸儒の詩書の二経に熟」する者の著とした。また、『章句』の経一章から伝第五章までの間に大幅な改訂を加えている。具体的には、『章句』経一章の後半部「物有本末」

以下を前半部と切り離し、伝第四章と伝第五章の間に置き、それによって朱熹によって衍文とされた伝第五章の「此謂知本」も自然な行文とされ、また朱熹が最も力を込めた「格物補伝」も挿入する必要の無いものとされた。そうした改訂の意味する所は、主として以下の(2)(3)である。

(2)『章句』経一章を仁斎がその前半部のみ独立させて『定本』第一章としたことは、仁斎が『章句』における三綱領一八条目の一体的理解を否定したことを意味する。「大学一篇、明德・新民・止於至善の三者を出ずして、止於至善は即ち明德・新民の標的也。」「大学は三綱領ありて八条目無し。」と仁斎は言う。つまり仁斎は、『大学』を専ら三綱領を説く書だとし、そこから八条目を排除した。こうした理解に伴い、『定本』は続く諸章のすべてを三綱領との関係から位置づけ、第二章：「首章明德を明らかにするの義を論ず」第三章：「首章民を新たにするの義を論ず」第四章：「首章止於至善の義を論ず」とし、さらに第五章以下終章までを「止於至善の義を推言する」ものと捉えていくことになる。そしてこうした三綱領中心の『大学』理解は、同時に三綱領の理解そのものの変容を伴うものでもあった。

(3)「格物」を「格は正也。物は「物有本末」の物。格物と云うは即ち本・始を先とし末・終を後にするの謂。「明明徳於天下」以下の七事を指して言う。」と解釈する仁斎が、『章句』経一章の後半部を伝第四章の後文として移動させ『定本』第五章として成立させたのは、「此謂知本」で締めくくられる『章句』伝第四章の「知本」の具体相を「格物」によって示すことによって第五章が「知本」を主題とすることを示し、さらにそのことを、『章句』では行き場を失ったかみえた伝第五章の「此謂知本此謂知之至也」を結語とすることによって明示することが『大学』作者の意図であった、との理解に基づくものだった。そしてさらに第五章の主題としての「知本」について仁斎は、「本を知るは即ち止於至善の要」であるとし、それが三綱領と強く関係づけられていることを指摘する。

(4) 三綱領を中心に『大学』を理解する仁斎において、三綱領の内容及びその位置づけも朱熹と大きく異なるものとなった。朱熹によれば、「明明徳」とは為政者が自己の道德性を完全を実現することであり、「新民」はそうして道德的に完成した為政者の感化により民の道德性が自ずから導かれることを意味する。そしてその道德性の核心が「事理当然の極」である「至善」とされた。これに対して仁斎は、「明明徳」を単に「明德」と読み替え、為政者に限らずすべての人々が「仁義礼智」の「徳」を実現することとし、その事を通じて人々が新たな人格として覚醒することを「新民」と捉えた。さらに「至善」を「仁敬孝慈信」あるいは「孝弟忠信」と捉えることで、日常的な道德的行為の中に「明德」「新民」の実現を求めることが三綱領の意義であるとした。

(5) 従来の仁斎の『大学』評価は、『大学』は孔子の遺書に非ざるの弁」を著し、その経書性を否定した側面のみが注目されてきたが、その内容を精査するとき、仁斎が『大学』を新たな理解から積極的に評価していた点に注目すべきことが明らかになった。

(6)『周易』評価については、仁斎の晩年定論が窺える林本『童子問』に見られる易経理解が、既に『易経古義』最古稿本(元禄中葉成立)にも明確に現れていたことが確認できた。即ち、一：『易経』十翼のうち繫辞伝・説卦伝を「卜筮の書」として否定的に捉え、対して象伝・象伝を「儒家の易」として積極的に評価すること、二：象象二伝を「陰陽消長の理」を明らかにすることを通じて日用人倫の動態理解に資するものとしたことである。そこには、繫辞伝をその形而上学の源泉と捉えた朱子学に対して、あくまでも『周易』を人倫日用の次元で理解しようとする仁斎の基本的姿勢を見て取ることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------